

雑誌『美術新報』が提示した同時代美術・美術家像——1909から1915年の作品・作家批評を手がかりに——

日比野 未夢 (千葉大学)

---

雑誌『美術新報』(画報社、1902-1920)は、美術の享受者である読者のニーズに応え、時には彼らを先導する意図をもって、多岐にわたる美術の情報を提供した。なかでも、日本における美術批評の先駆・岩村透(1870-1917)が顧問を、敏腕編集者にして自身も美術批評をした坂井犀水(1871-1940)が編集主幹を務めた1909~1915年のあいだは、その特徴がいかに発揮され、隆盛期であった。近年の研究では、朴昭炫『「戦場」としての美術館：日本の近代美術館設立運動／論争史』(ブリュッケ、2012)、今橋映子『近代日本の美術思想——美術批評家・岩村透とその時代——』(白水社、2021)が、同誌の特徴として美術の社会的環境に関わる問題提起を挙げ、その先進性を評価している。これにより、保守的で地味な情報誌だという従来の見方は覆された。しかし、管見の限りでは、当時の美術界における総合美術誌としての同誌の役割に踏み込み、国内の同時代美術の動向や論争への目配せや、他媒体との連携を分析し、そのメディアとしての意義を問う包括的な研究は未だなされていない。以上をふまえ、発表者は、岩村・犀水時代の『美術新報』が果たそうとした役割に着目し、同誌に掲載された作品・作家批評を改めて分析する。

本発表は以下の順に検討を進める。まず『美術新報』に掲載された文部省美術展覧会に関する記事を整理する。同誌は、同時代の日本社会における美術の周辺環境を論じる際に、また作品・作家批評においても、文展を引き合いに出すことが少なくなかった。その上で、作品・作家批評においては、後に後期印象派と呼ばれる当時の西洋における美術の最新動向を追いかけ、感化される日本の若手作家に対する理解と苦言がみられることに着目する。ここでは今橋の見解、すなわち、顧問・岩村は文明史レベルで西洋美術史を捉え、後期印象派を一時的な流行とみなし、あえて積極的な批評を控えたという指摘をふまえ、その岩村の批評態度が『美術新報』にも共有されていたかを検証する。次に、同誌が評価した若手作家・石井柏亭(1882-1958)、南薫造(1883-1950)、山下新太郎(1881-1966)に対する批評を精読する。特に1910年代前半における洋画の新旧論争、すなわち1911-1912年の「絵画の約束論争」を皮切りに、後に二科運動へと繋がる「新画運動」に対する各作家の関わり方に留意する。可能な限り、当該期の他の雑誌・新聞の言論姿勢との比較を導入し、『美術新報』の特徴を浮かび上がらせたい。

以上により、『美術新報』のジャーナリズムとしての機能を備えた総合美術雑誌と

しての自負と、同誌が展開した美術批評の相関について考察する。加えて、『美術新報』が、必ずしも美術に特化していない、同時代の他の新聞・雑誌の記事を引用することで、現在進行形の芸術全般、そして社会の問題として、日本国内における美術の未来を、読者に問いかけた可能性を指摘する。